特集　魔法の習慣12

第１章
常に釣り場に立つ「現場感」がアイデアを生む
――バスプロアングラー　川村　光大郎さん

下司　健二郎
東京都中小企業診断士協会中央支部

１．バスフィッシングへの熱い思い

梅雨の明けた８月上旬。強い日差しが照り付ける中，川村光大郎さんが代表取締役を務める Bottomup 株式会社の事務所を訪ねた。川村さんは真夏の太陽にも負けない笑顔で，バスフィッシングへの情熱を次のように話す。

「釣り以外のことを考えている時間は，ほぼないかもしれません。行ける日は毎日でも釣りに行きたい」

バスフィッシングとは，魚の一種であるブラックバス（以下，バス）をルアーと呼ばれる疑似餌で釣り上げるスポーツフィッシングである。各地でプロ，アマ問わずトーナメントが実施されている，人気のある釣りジャンルだ。

川村さんは第一線で活躍するバスプロアングラー（以下，バスプロ）である。

バスプロアングラーの川村光大郎さん。ルアーテスト用の巨大水槽とともに

バスプロとは，バスフィッシングを生業とし，トーナメントの賞金やメディア出演，スポンサーから収入を得ている釣り人の総称だ。

今回は，そのトップランナーである川村さんに「魔法の習慣」を伺った。

２．一本立ちのきっかけは妻からの言葉

川村さんにバスプロになったきっかけを聞くと，「こうなりたいと思ってなったわけではなく，なっていたというほうが正しい」と意外な答えが返ってきた。

もともとは，地元の茨城県でドライバーとして働き，休日に釣りへ出かける生活を送っていた。その生活に川村さん自身は満足していたのだが，「妻から『そんなに釣りが好きなのに，なぜそれを仕事にしないの？』と言われるうちに，徐々にその気になってきました」と笑いながら話す。妻のこの言葉に背中を押される形で，川村さんはバスプロとして一本立ちすることとなった。

３．自然を相手に結果を出す思考法

バスフィッシングの難しさの１つに，自然が相手であることが挙げられる。にわか雨，急な気温変化，強風，水の増減など，さまざまな予期せぬ事態が発生する。バスプロは，コントロールができない自然を相手に結果を出し続けなければならない。

この難しさを象徴する仕事が，実釣ロケ（釣りをする現場の取材）である。実釣ロケでは，あらかじめ定められた日程，釣り場で撮影を行う。もちろん，釣れる確証はどこにもない。どんなに厳しい状況下でも，魚を釣り上げなければならないのだ。かなりのプレッシャーと推測されるが，その実釣ロケでの心理状況を次のように説明してくれた。

「ロケは，ほとんどが思いどおりにいきません。朝の釣れそうな雰囲気から，あっという間に調子が崩れることもあります」

当然，これで諦めるわけにはいかない。ここからどうやって持ち直していくのか。

「ダメなりに最善を尽くします。ただ頑張るといっても，がむしゃらに頑張ればよいわけではありません。そうですね，まずは『魚の気持ち』になります」

魚の気持ち，つまり，自分が魚だったらどうしたいかを考えるそうだ。たとえば，水が濁ったら魚はどこへ行きたいか，暑かったらどうか，寒かったらどうかを考え，１匹にたどり着くまでの攻略方法を立て直すのだ。

「次に，ブラックバスに対して，常に謙虚でいること。相手が魚だからと侮らない。謙虚な姿勢で，常に全力で立ち向かいます」

たしかに，相手が魚だとついつい油断してしまいそうだ。しかし，川村さんは甘さをまったく見せない。ブラックバスと対峙するときは，車を止める位置やドアを閉める音，水際に近づくまでの経路や足音にさえ気を遣う。周りから見ると，異常なまでに慎重だ。これらの行動は相手が魚だと侮らず，考えうる最善を尽くすという思考からきている。

なぜ，そこまで一切の妥協を許さないのか。

「取材の依頼をいただいているからには，その期待に応えなくてはなりません。多くのバスプロたちの中で私に声をかけてもらったのは，『川村だったら釣ってくれるだろう』と信じてくれているからだと思っています。ですから，少し厳しいからといって，あっけなく０匹で終わって言い訳をしているようでは，次に声をかけてもらえません」

見事なバスを釣り，ガッツポーズを決める川村さん（提供：Bottomup 株式会社）

しかし，自然が相手のバスフィッシング。１匹も釣れずに終わってしまうこともある。川村さんは力強く続けた。

「そうはいっても，釣果が０匹の日もあります。しかし，そのときにも『川村がこれだけ頑張って，必死にやって，それでも釣れなかったら仕方がない』と思ってもらえるような釣りをすべて見せます。だから，最後まで諦めない。諦めないことで，最後の最後で何とかなった経験がたくさんあります」

謙虚な姿勢で常に全力で立ち向かう。そして，決して最後まで諦めない。これが，自然を相手に活躍し続けるトッププロの思考法といえる。

４．ルアー開発で変化したバスプロ人生

川村さんに人生のターニングポイントを問うと，バスフィッシングの経験を生かして，ルアーの開発を始めたことだという。

もともとはモノづくりに関心がなかった川村さんだが，初めて担当した開発でこれまでにない動きをするルアーを作り出すことができたのだ。

「そのルアーを世に出したところ，とても大きな反響がありました。そして，自分が開発した製品が多くの釣果につながっていることに快感を覚えてしまいました。趣味でやっていただけでは決して味わうことができない

感覚を経験したのです」

こうしてルアー開発の世界にのめり込んでいった川村さんだが，モノづくりへのこだわりを「病的」だと自己分析する。

「自分が納得できるまで，何度でも金型を作ってテストを繰り返します。これほど細部にまでこだわっているメーカーは，そうはないはずです。発表するからには，前例がない動きをするルアーを目標にしていますし，自分がベストだと思ったものでなければ，発売する意味はないと考えています」

川村さんがルアー開発について話すときに何度も口にしたのが，「これまでにない」，「前例がない」という言葉である。これらは，モノづくりにかかわるすべての人にとって目標だろう。

一方で，言うは易く行うは難し，そこには生みの苦しみが存在する。では，川村さんはどのようにアイデアを生み出し，実現しているのだろうか。

「常に釣りのことを考える癖がついてしまっています。アイデアを思いついたら，すぐに書き留めて，風化しないうちに試作品を作り，できる限りテストを行っています」

そのほとんどはうまくいかないが，試行錯誤を繰り返しているうちに，実現可能な兆しが見えてくるときがある。そして，それをもっと追い込んでいく。とにかく手を動かして試してみることで，アイデアの実現に近づけるのだ。

ルアーの開発作業に取り組む川村さん（提供：Bottomup株式会社）

「これまでにないものを作る」と妥協なき目標を設定し，何度も試行錯誤する。そして，自分が納得できるまで，モノづくりに取り組む。こうしたこだわりが，名ルアーを生み出し続ける魔法の習慣なのだろう。

5．「バスプロ」×「ルアー開発」＝川村光大郎

「バスプロ」と「ルアー開発」，この２つの車輪は密接にリンクし，川村さんの魅力を増す原動力となっている。

メディアの人気コンテンツの１つに，バスプロ同士が対決する企画がある。予選を勝ち上がってきた強者たちが一堂に会し，釣り上げた魚の重量を競い合う企画である。各バスプロが自分のプライドをかけて戦いに挑む。

そのような強者たちの中で勝ち残り，優勝するために川村さんが心がけていること。それは，ほかのバスプロに負けない自分の強みを持つことだという。そして，その強みを問うと，「モノづくりをしていること」ときっぱりと答える。

「新しいアイデアや釣り方は，釣り場で生まれます。釣り場で生まれた新しいアイデアをルアー開発に反映させ，また釣り場で試す。そこで生まれたアイデアを，再度ルアー開発へ反映させる。このサイクルをずっと繰り返します。そのため，毎週，釣り場に行きます。これは欠かさない習慣です」

バスプロとしてトップランナーまで駆け上がり，ルアーメーカーの代表取締役を務める川村さん。立場が変われども，常にあるのは「現場感」。釣り場に立ち，魚と「会話」することが，これまでにないルアーのアイデアを生み出し，バスプロとしての川村さんの強さを支えている。

前例がないやり方や製品を生み出すタネは，現場にある。だから，現場である釣り場へ愚直に立ち続ける。これこそが，川村さんが第一線で活躍し続ける「魔法の習慣」といえる。

川村さんが開発した数々の名ルアー

６．業界全体を happy にしたい

「僕の理想は『All happy』なのです」

川村さんは，一個人，一会社の枠を飛び越え，バスフィッシング業界全体の幸せに貢献したいと考えている。

「ルアーメーカーとして，釣果につながる製品を作る。同時に，バスプロとして新しい釣り方を発信する。それで魚が釣れれば，ルアーを買ってくれた釣り人は喜ぶし，売れたお店も喜ぶ。そして，工場に生産を依頼できれば，工場も嬉しい。こうやって，業界全体が happy になってほしい。そして，その根幹にあるのがモノづくりだと思っています。ですから，ルアー開発では決して妥協しません」

ルアー開発に携わるバスプロとしての強い意志が伝わってきた。

そして，川村さんのすごいところは，「All happy」の対象にブラックバスも含まれることだ。もちろん，釣られた魚は幸せとはいえないかもしれない。しかし，釣った後の魚の扱いが実に丁寧なのだ。

「釣った後，魚を乾いた地面につけないように心がけています。また，釣った魚を空気中に長く置かない。発信する側の人間として，命や自然を大事にすることも伝えていきたいのです」

特に，釣った魚をリリースする際に「ありがとう」と魚に声をかける姿は印象的だ（釣り上げたブラックバスのリリースを禁止している釣り場もある）。自然を相手にしているからこそ，魚への感謝を忘れてはならないのだ。ここにも，川村さんの魔法の習慣が垣間見えた。

７．新たな挑戦

川村さんに夢を聞いた。それはボートフィッシング（ボートに乗船して湖面からバスを釣るスタイル）でのトーナメント参戦だそうだ。これまで陸からバスを釣る岸釣りのスペシャリストとして数々の賞を獲得してきた川村さんだが，ボートフィッシングのトーナメントに憧れがあるという。

「とはいえ，自分は器用ではありません。そちらに足を踏み込むと，夢中になってしまうのが目に見えています。あくまで今の仕事が最優先。しかし，どこかで思い切るしかないのでしょう」

川村さんは笑いながら話す。常に全力で立ち向かう川村さんならではの悩みだ。

夢の実現は，まだ先かもしれない。しかし，岸釣り・ボートフィッシングを問わず，今後も川村さんは釣り場に立ち続け，バスフィッシング業界に「All happy」を届けていくことだろう。

川村　光大郎
（かわむら　こうたろう）
Bottomuup 株式会社代表取締役。バスフィッシングを生きがいとし，フィールドで培った感性をルアー開発に注ぐ。各メディア，イベントなどを通じ，釣り方やバスフィッシングの魅力を多くの人に伝えている。

下司　健二郎
（げし　けんじろう）
1985年生まれ。埼玉県出身。東京大学大学院新領域創成科学研究科修了。修了後は食品メーカーで製品開発，海外事業，新規事業に従事。2020年中小企業診断士登録。